

# 「言語と方言」を読む

——「専門家」の誤読と権威主義——

栗 林 均

『思想』一〇月号に掲載されたフフバートル氏の「言語と方言」——『言語学大辞典』の刊行によせて——と題する一文は、一九八八年に三省堂から刊行された『言語学大辞典』第一巻、世界言語編(上)の中で、筆者が執筆を担当した「オルドス語」(1096-1099頁)の記述に対する論評である。そこに述べられているフフバートル氏の主張を要約すれば、次のようになる。

「オルドス語」の項目の執筆者(栗林)は、「オルドス語」が独立の言語ではなく、方言であることを知りつつ、これを言語に仕立てあげるために、無理な説明を行っている。すなわち、「オルドス語における一連の独自の特徴」などと称しているが、それらを検討すると、実は「内モンゴルの他の諸方言と比較して、それほどでもない特徴」を列挙しているにすぎない。そして、執筆者(栗林)がなぜそのようなことをしたかという点、第一には、

この方言がベルギー出身のモスタールトの名と結びついて、学界的によく知られた方言だったからであり、第二には『言語学大辞典』の編者による項目の立て方を無批判に受け容れたためであろう、ということである。

しかし、フフバートル氏の批判と推論は、「オルドス語」の項目の記述を誤読し、その内容を理解できないままに、勝手な憶測をめぐらした暴論である。氏に対して誤りをただし、「オルドス語」の執筆者である私に対するいわれなき中傷を排することは当事者としての義務であると考へ、ここに筆をとる次第である。

筆者が、「オルドス語」を、内モンゴルの諸方言の一つとみなしている、というのは、そのとおりである。これは、項目の冒頭で、「内蒙古語を構成する一方言」(1096頁)としたり、さらに、これが「チャハル(Chakhar)方言、ハラチン(Kharachin)方言、ホルチン(Khorchin)方言等」とも

に、内蒙古語の一方言として位置づけられ、この観点からすればオルドス「方言」というよび名が適切である。」(107頁)と繰り返して述べているとおりである。

フフバートル氏が問題としているのは、それでは、なぜ見出しを「オルドス語」としたか、という点である。氏は、「おそらく、この「大辞典」の項目をたてたのは、執筆者自身ではなく、その名の掲げられている三人の編者であろう。」としているが、見当違いの推測である。「オルドス語」という見出しを立てることに判断を下したのは、執筆者自身であり、それを『言語学大辞典』の編修部が了承したものである。したがって、「オルドス語」の項目については、その内容のみならず、見出しの設定についても、執筆者である私に責任があることを明言しておく。それが適切であったかどうか、以下にその次第を記して、改めてフフバートル氏と読者の判断を仰ぎたい。

「オルドス語」という見出しを立てることにしたひとつの理由は、日本語の中にすでにこの表現が存在していることである。

たとえば、『フルース言語学用語辞典』(大修館書店、一九八〇)の(付録)「世界の言語」には、次のようにある(四四六頁)。

オルドス語 仏 *ordos*, *urdu*s/英 *Ordos* モンゴル語の一つ。内モンゴル自治区の綏遠(すいえん *Sui Yans*)省に、これに近いチャハル(*Chakhar*)方言は内モンゴルのチャハル地区に行なわれる。言語人口三七・五万。

また、『月刊言語』の一九八三年六月号(第二二巻六号)に掲載された服部四郎氏の論文「蒙古語諸言語の「i」の折れ」では「オルドス、ブリヤート、カルムイクの諸言語」(111, 112頁)、「オルドス語とハルハ語」(112頁)といった表現がみられる。

前者は、専門的知識の欠如による間違った命名と説明であり、後者は比較方法上の独立の単位を強調した用法で、両者の意味合いと妥当性は全く異なるが、とにかく、「オルドス語」という表現が、現実にならず存在している。こうした表現を目にした初学者や学習者が、さらに詳しい情報をもとめて『言語学大辞典』をひもとくことを考慮に入れた場合、読者に対して、「オルドス語」が実は方言であることを明示したうえで、前者のような説明は訂正し、後者のような用法は特殊なものであることを説明することが必要であると思われた。

もちろん、これだけの理由であれば、「オルドス語」を空見出しとして、短い説明で済みますか、あるいは「オルドス方言」を見出しとすることもできたはずである。「オルドス語」を空見出しにしなかったのは、上に述べた理由に加えて、その見出しのもとに説明すべき価値のある事実があると判断したためであり(これについては後述する)、また、見出しを「オルドス方言」としなかったのは、「見出しに方言名は取らない」という編集方針のかねあひもあったからである。

「オルドス語」という表現が誤解を生む可能性をはらん

でいることに、筆者自身、思い至らなかつたわけではない。しかし、記述の中で、それが「方言」であることを明示し、この項目を立てる意義を述べることによって、誤解は防げると考え、それを実行したのである。

このやり方は、「オルドス語」の項の「参考文献」にあげた *Handbuch der Orientalistik: Mongolistik* (Leiden/Köln, 1964) がとっている方法と共通している。そこでは“Das Ordoische”(オルドス語)という独立の章を設けているが、それをひとつの *Dialekt*(方言)であると記述し、その概説を行っている。“Das Ordoische”(オルドス語)という独立の章立ては、モンゴル語学研究における、この方言の特殊な位置づけを反映したものであると、筆者は考えている。

『言語学大辞典』の「オルドス語」の項目では、一般的な記述に続けて「ここでは、モスタールトが記述した口語の体系を「オルドス語」として、その主要な言語的特徴を概観する。」(197頁)とことわったうえで、「オルドス語」という表現を用いている。これは、意味を限定して用いた特別な用法である。「オルドス語」という表現を用いているからといって、「方言」を「言語」に仕立て上げようとしている、などと受け取るのは全くの筋違いである。

もし「オルドス語」という表現を使うことで、フフバートル氏を含むモンゴル人に不快、嫌悪、苦痛等の「納得できない」感情を喚起するものであれば、私は自らの不明を恥じ、不用意を率直に詫びたいと思う。これは「内蒙古語」についても同様である。しかし、氏の文章を読む限り、氏

が「納得できない」としているのは、「方言」を「言語」に仕立てあげようとした私の意図と行為であるらしい。

繰り返すが、私が「方言」を「言語」に仕立てあげようとしている、というのは完全な誤解である。この誤解は、次に示すように、フフバートル氏が「オルドス語」の記述を誤読して、その意義を理解できなかったことに原因がある。

「オルドス語」という独立の項目で、どうしても書いておかなければならないと筆者が判断した、その「内容」については、記述の中で次のように明記している。

「それは、モスタールトによるオルドス語の研究がモンゴル語研究史において重要な位置を占めているというだけでなく、そこに記述されているオルドス語自体が、モンゴル系諸言語において、かなり特殊な言語的な特徴を有していることによる。」(197頁)

ここに述べられている第一の理由について、多言は要しないであろう。筆者は、過去の優れた研究成果を継承し、これを一般に、また将来に伝えることは現代の研究者の責務であると考えた。しかし、フフバートル氏は、「一人の研究者の先駆的な研究をたたえたいあまり、また学界的シンボルの「オルドス語」を輝かせたいあまり、……」という受け取りかたをしている。氏の文章を読む限り、先人のすぐれた学問的業績に対する筆者の評価も敬意も、理解されているかどうか、疑わしい。

第二の理由、つまり、「そこに記述されているオルドス語

自体が、モンゴル系諸言語において、かなり特殊な言語的な特徴を有している」ということについて、フフバートル氏は、列挙された「オルドス語」の特徴が「特殊でもなんでもない」ことを示そうと、ひとつひとつに反論しているが、それを見ると、氏が筆者の記述をまったく理解していないことが分かる。

記述では、「オルドス語には、他の内モンゴル諸方言のみならず、それ以外の諸言語、諸方言でも失われた一連の古風な言語的特徴が保存されており、モンゴル語の歴史・比較研究にとって貴重な証拠を提供している。」(1997年)と述べているが、筆者がその事例として挙げているのは、次の二点だけである。

(1) 語の第二音節以降の短母音が比較的よく保たれていること。

(2) チャハル方言等の第一音節の広い円唇母音 $o$ 、 $o$ に対応して、一連の語で、それぞれ狭い円唇母音 $u$ 、 $u$ が対応していること。

独自の特徴はこれにとどまるものではないが、事例としては、もっとも重要と思われる右の二点をあげて説明したのである。

それに続いて、「オルドス語に目立った音声的特徴」を説明し、その後「目立った形態的特徴」を列挙している。ここで改めて確認しておかなければならないのは、「目立った」特徴が必ずしも「独自の」特徴であることを意味しない、ということである。いうまでもなく、「独自の」特徴

というのは、その言語・方言だけが持っていて、他には見られない特徴である。「目立った音声的・形態的特徴」というのは、言語分類や方言分類の基準となるような主要な特徴と考えてよい。多くの特徴の中から、重要と思われるものをいくつか選択して「目立った」特徴と呼んだわけである。「独自の特徴」は「目立った特徴」といえるが、逆は必ずしも真とはかぎらない。たとえていえば、人相で「頭が禿げている」「あごひげがある」「黒子(ほくろ)がある」等の特徴は、「目立った特徴」とみなすことができるが、それらは必ずしも「独自の特徴」とはなりえないようなものである。

フフバートル氏の重大な誤読は、オルドス方言の「独自の特徴」と「目立った音声的・形態的特徴」とを混同していることである。氏の論証の大部分は、筆者が「目立った音声的・形態的特徴」として列挙したものを取り上げて、それらがオルドス方言に「独自の」特徴ではなく、他の内モンゴルの方言にも見いだされる、ということ为例証することに向けられている。しかし、筆者は、それらがオルドス語に「独自」だとも「特殊」だとも書いていないし、そのように主張してもいけない。要するに、フフバートル氏は、「オルドス語の目立った特徴」として列挙されているものを、すべて、執筆者が「独自の特徴」として主張しているもの、「方言」を「言語」に仕立てあげるために(と誤読して、「それらはオルドス方言に独自ではない」と論証しようとしたもので、完全に的外れの議論である。しかも、これが

「なぜ執筆者はそのような無理をしたのか」という、それに続く推論と批判の出発点であり、氏の議論の依って立つ基盤である。

オルドス方言の「目立った特徴」のうちのいくつかが、他の内モンゴルの方言に共有されていることは、フフバートル氏の指摘を待つまでもなく、周知の事実である。それらのうちの主要なものについては筆者自身、すでに『言語学大辞典』第二巻、世界言語編(中)の「内蒙古語」(1426-1434頁)の項に同じことを書いている(1)。

そこでは、内モンゴルのホルチン方言、ハラチン方言、バーリン方言、チャハル方言、ハルハ方言、オルドス方言、アラシャン方言について、それぞれの「目立った言語的特徴」を列挙しているが、それらの中には、互いにいくつかの方言に共通にみられる特徴も含まれている。それらは、複数の方言に共有されている以上、当該方言の「独自の特徴」ではありえないが、それでもやはり、それぞれの方言を特徴づける性格のものであることに変わりはない。

フフバートル氏が述べていることの中には、たしかに内モンゴル出身の氏ならではのと思わせる興味深い情報も見られる(たとえば、「語彙」の領域の話、等)。しかし、その多くは、議論の焦点がずれており、論理が杜撰である(2)。

フフバートル氏が、オルドス方言の「独自の特徴」と「目立った特徴」を同一視しているということは、筆者がそこで強調している、モンゴル語研究における両者の意義の違いについても全く理解していないということである。

先に述べた「独自の特徴」(前頁上段参照)の(1)について、フフバートル氏の述べることは次のとおりである。

「執筆者によれば、「何よりもまず、語の第二音節以降の短母音が比較的よく保たれていることである」として、四つの語例をあげている。これはたしかにオルドス方言の特徴であるが、しかし、それが現在のオルドス方言においてどれだけ保たれているかにより、「かなり特殊な」特徴だという表現が誇張になるかも知れないと思われる。」

問題は、現在のオルドス方言に関するものでもないし、四つの語例に限られるものでもない。「オルドス語」の項の記述では、右の特徴を述べるに先立って、「ここでは、モスタールトが記述した口語の体系を「オルドス語」として、その主要な言語的特徴を概観する。」(1097頁)とことわった上で、次のように読者に注意を喚起しているではないか。

「モスタールトの記録から半世紀以上の歳月を経た今日、その間の激しい社会的変動や住民の移動、交通、通信、教育の発展により、オルドス語自体も、中国語や他の内モンゴル諸方言との接触による混淆が進んでいると推察される。事実、今世紀後半に公刊されたオルドス方言の記述には、第二音節以降の短母音の弱化等、モスタールトの記述と異なった報告もある(たとえば、B. H. Todaeva, 1960)が、もしそうであるにしても、モスタールトの記述資料は、以前の言語状態の記録として、いっそう貴重である。」(1097頁)

四つの語例(ama「ロ」, amu「穀類」, ami「生命」, am「平安」)は、第二音節の短母音の違いだけによって意味が区別されている典型的な例である。この例に代表されるように、オルドス方言では、第二音節の短母音が語の意味を区別する役割を果たしているのであって、このことはオルドス方言のすべての単語についてあてはまることを示している。

この事実が、モンゴル語史研究においてもつ価値は、はかりしれない。「第二音節以降の短母音は、チャハル方言等、他の内モンゴル諸方言のみならず、ハルハ・モンゴル語、ブリヤート語、カルムイク語、ダグル語等、語の第一音節に強勢をもつ諸言語、諸方言において一様に弱化している」(1997年)の通りであり、またモンゴル語、バオアン語、ドゥンシャン語、シラ・ユグル語、モゴル語等、モンゴル系その他の言語においては、母音体系の大幅な改新が認められ、第二音節以降の短母音の歴史をたどることが困難となっているからである。また過去の資料は量的に限られているうえに、文字資料としての批判と解釈を施さなければならぬ。一体、オルドス方言の資料が利用できないとしたら、モンゴル祖語における第二音節以降の短母音の推定には、おそろしく複雑で手間のかかる手続きが要求されるはずである。オルドス方言は、この特徴によって、モンゴル祖語の第二音節以降の短母音の音質の推定にとって、独立の得難い資料を提供している存在である。

「独自の特徴」の(2)についても同様で、オルドス方言に

おける独自の特徴は、この方言における独自の変化を物語るものであるが、それがモンゴル祖語における第二音節の母音の音質を推定する上で独立の資料となっている。

さらに、記述では触れなかったが、これ以外の、オルドス方言の「独自の特徴」としては、母音eとならんで、狭いeが存在すること、母音iの折れの現れ、とくに特定の環境における母音iの保持、古文獻に見られる語彙との対応(たとえばA. Mostaert, "Sur quelques passages de l'histoire Secrète des Mongols", *Harvard Journal of Asiatic Studies*, 13(1950), 14(1951), 15(1952)を参照)等を指摘することができる。

オルドス方言の「独自の特徴」を強調したからといって、筆者は、内モンゴルの諸方言の中で、オルドス方言だけが言語的に特殊だと主張しようとするものではない。このような特殊な特徴が、内モンゴルの他の方言に見いだされ、それによって、モンゴル祖語の再構に新たな光が投げかけられる可能性は、十分ありうると思われる。現在の段階でそれがなされていないのは、資料上の制限によるものと考えられる。だからこそ、研究のゆき届いたオルドス方言を一つの事例として、こうした比較方法上の可能性を示すことが必要と考えたのである。このような観点から内モンゴル諸方言の研究を行いたいという筆者の意志表明であり、またこのような観点からの研究を期待する、という呼びかけである。

「オルドス語」の項目は、上述のように特殊な設定理由

から、他の独立の言語の諸項目とは違って、音韻体系や文法体系を提示するというよりも、むしろ、「モンゴル諸語研究におけるオルドス方言の位置づけ」とでも題する論文の体裁となっている。フフバートル氏のような「専門家」にこそ、その意味するところを汲んで欲しかったのであるが、理解されなかったのは残念である。

フフバートル氏は、論評の冒頭で、『言語学大辞典』について、「これは私のような、アジア出身の研究者にとつては大いに期待をかけたいい気持ちになる場所である。なぜなら、日本製の言語学辞典である以上、そこには当然、アジアのまなざしがあるにちがいないと思うからである。単なる欧米本のなぞり、焼きなおしではなく、アジア人ならではの観点が。」と述べている。これに対して、「オルドス語」の項目は、そのような氏の期待を裏切る反例として組上りにぼせられたものであるらしい。「オルドス語」の項の内容が「単なる欧米本のなぞり、焼きなおし」かどうか、また、無理を承知で「方言」を「言語」に仕立て上げるためにでっち上げた内容かどうか、改めて氏の批評を乞いたいものである。

次に、フフバートル氏が、誤読にもとづいて繰り広げているあれこれの憶測についても触れないわけにはいかない。フフバートル氏は言う。

「さて、専門家として、「オルドス語」の項目をすなおに読めば、執筆者が、無理な役割と知りつつ、つじつま合わせをしながら、苦勞して書いているさまが、手にとる

ようによくわかる。」

氏のいう「専門家」としての読み方が、いかなるものか、また氏の読み方が「すなお」なものかどうかは、すでに見たとおりである。氏には「手にとるようによく」見えていられない執筆者の姿は、誤読の上に願った幻影である。

フフバートル氏の憶測は、膨らんでいく。

「なぜ、そういうことになってしまったのだろうか。おそらく、この「大辞典」の項目をたてたのは、執筆者自身ではなく、その名の掲げられている三人の編者であろう。」

すでに見たように、「オルドス語」の項目を立てたのは筆者自身であり、その理由は、記述の中に明記してある。フフバートル氏が「すなお」に読んでくれなかっただけの話である。

驚くべきことに、氏の憶測は私の研究者としての姿勢にまで及ぶ。

「指名を受けた執筆者は、これは無理な注文だと思ったのなら——そう思ったはずであることは、くり返し引用した、矛盾に満ちた表現から明らかだ——この項目をたてるのは適切でないと思います、どうしてもオルドス方言にくわしくふれたいのならば、別の、たとえば「内モンゴルの諸方言」というようなところで取りあげるべきです、というふうに、編者たちに助言をしてあげるべきだったと思う。」

フフバートル氏の目に映っている執筆者の姿は、自らの

信念と学問を曲げて權威に追従する人間の姿である。これは私に対する侮辱である。

「オルドス語」の項目に「矛盾に満ちた表現」が見いだされるということ根拠として、フフバートル氏が執筆者と編者に対しておこなっている推定は、あまりにも一方的で独断的である。百歩譲って、「オルドス語」の項目に「矛盾に満ちた表現」が見いだされるとしても、それに関して、フフバートル氏が考えた以外にも様々な理由が考えられるはずである。ところが、氏の頭にあつて離れないのは「いづれも学識豊かで教養にあふれた大学者」であり、「世に名のとどろいた大学者」である編者と、それに追従する執筆者という図式である。こうした「權威主義」の固定観念から抜け出せない発想法こそ、權威主義の具現と呼ぶにふさわしいものであろう。

「オルドス語」の執筆者である私と、『言語学大辞典』の編者や編集方針にまで勝手な憶測をめぐらし、読者に誤った観念を植え付ける氏の責任は重い。

フフバートル氏の論評は、日本の精神風土にまで到達する。

「日本がいかに高度成長をとげたとしても、いまだ西欧学問の權威主義の支配下にあるらしいのは、……」

一部をもって全体を推論したのであるうか、それとも全体の中にかような一部が存在すると言いたいのであろうか。いづれにしても、氏が推論の根拠としている、「オルドス語」の「矛盾に満ちた表現」は、氏の誤読が生んだ幻であ

り、氏の推論の前提は失われた。

『言語学大辞典』を評することで、日本の学問社会の実態にまで迫ろうとしたフフバートル氏の構想はまことに壮大というべきかも知れないが、わずかに二頁余の「オルドス語」の項目を通して氏が垣間見たものは、誤読の上に憶測を積み重ねて浮かびあがった「偏見」という名の廢氣楼に過ぎない。

(1) たとえば、次のような特徴については、「内蒙古語」の各方言の記述のなかで触れている。

① 「チャハル方言等の母音  $\text{r}$ 、 $\text{y}$ 、 $\text{e}$ 、 $\text{o}$  の前に現れる口蓋摩擦音  $\text{x}$  に対して、閉鎖音  $\text{k}$  が対応する」特徴が、オイラト方言やアラシャン方言にも見られること。

② 「語末の鼻音  $\text{n}$  と  $\text{ŋ}$  の区別が保持されている」特徴がホルチン方言、ハラチン方言、バーリン方言、アラシャン方言にも見られること。

③ 「連合格の接尾辞  $\text{-(i)ŋ(i)ŋ}$  を用いる」特徴がホルチン方言、ハラチン方言、バーリン方言にも見られること、等。

(2) フフバートル氏の「論証」の中で、議論の論点がずれているもの、筆者の記述を理解していないもの、主張の受け入れられないもののうち、主要なものを次に簡条書にして示す。

① 「オルドス語の目立った形態的特徴の一つは、名詞複数接尾辞の一つとして、 $\text{-ŋ}$  という形を用いる」という記述について、フフバートル氏は「しかし、これは、内モンゴルの諸方言では珍しくなく、辞典にも記載されている。」



として、(注)で内蒙古大学蒙古語文研究編『蒙漢辞典』(呼和浩特、一九七七年)の一四四〇頁を参照するように指示している。

氏の指摘する『蒙漢辞典』一四四〇頁にあるのは人称代名詞の一覧表である。同書一四二六頁の「名詞の複数接尾辞の一覧表」にこの接尾辞は記載されていない。「名詞複数接尾辞の-*is*」も、はたして、内モンゴルの諸方言で珍しくないのかどうか。論点がずれている。

②「名詞の曲用で、不定の*n*をもつ名詞は、不定の*n*を伴った形が属格形となり、*n*に終る名詞は接尾辞「*n*」をとって属格形となる。」という記述に対して、フフバートル氏は「内モンゴルの諸方言においては、オルドス方言のみならず、例えば、モンゴル文語の *qonin-u niqan*(羊の肉)が *xenin max* になるように不定の*n*をもつ名詞がそのまま属格形になる傾向がある」と書いている。

氏が(注)で参照を指示する *Cengeltei* 《*Odu üye-yin Mongγul kelen-ü jüi*》二〇一頁には、「属格形の省略形」として、「この現象は、まさに発生しつつある段階にある」と述べられている。オルドス方言における現象をこれと同一視するのは適当でない。

③「人称代名詞の第一人称複数形 *bida*(我々)の斜格形語幹が *nan* となる。(例) *mani*(我々の)、『*mandu*(我々に)、『*manig*(我々を)、『*manas*(我々から)』という記述に対して、フフバートル氏は、これが「オルドス語」の特徴としてもものしく掲げられているのが不思議なほど、最も一般的な形」としている。

氏は、筆者の記述を理解していないし、おそらくモスタ

ルトのオルドス方言の文法概説も読んでいない。筆者は例に挙げた斜格(主格以外の格)形自体が珍しいと言っているのではない。第一人称複数代名詞に *bida* の系列と *nan* の系列があることはよく知られているが、オルドス方言では、斜格形で *bida* の系列が用いられず(例外は *nan* と並んで用いられる属格形の *bidani*「我々の」)、『*nan*』の系列が *bida* の系列にそっくり置き替わっているのである。氏は、これをも「最も一般的」というつもりであろうか。

④「指示代名詞 *ene*(これ)、『*tete*(あれ、それ)』の斜格形語幹は、『それぞれ *enhi*、『*terhi*』である』という記述に対して、フフバートル氏は次のように述べている。「しかし、チャハル方言でも、『*enhi-dxi*』これに入れよ、『*terhi*』(ママ) *düd*「彼(彼女)を呼べ」のように用いられるので、これを以て特にオルドス的とは言えないであろう。」ここでも記述の文章が理解されているかどうか疑わしい。オルドス方言では、斜格(主格以外)形の語幹に一貫して *enhi*、『*terhi*』が用いられる(ただし造格形の語幹は *enhi*、『*terhi*』)ことを述べているのであるが、はたしてそれがチャハル方言でも、同様かどうかを述べるべきである。道布編著『蒙古語簡志』(北京、一九八三年、七一頁)によれば、チャハル方言でこの語幹が現れるのは位格と共同格だけである。

また、チャハル方言にも見られる特徴だからといって「オルドス的とは言えない」というのは、言語的・方言的特徴が必ずしもその言語・方言に特有なものとは限らない、ということを理解していないことを如実に示すことば

である。筆者は、これがカルムイク語と共通していることに興味をもって、「オルドス語」の特徴として挙げた。

⑤「動詞活用語尾の中で目立つのは、形動詞 *naa(-mar, -mor, -mör)* と並んで、*-ma(-me, -mo, -mō) ~ -n* が用いられることである。」という記述に対し、フフバートル氏は、「この形は、書き言葉にも次の例のように頻繁に見られる。」と書いて、文章語の例を挙げている。

書き言葉に使われていても、他の方言に見られなければオルドス方言「独自」の特徴と呼ぶことさえできよう。一般に、書き言葉に用いられている形が、生きた方言に実証されるのであれば、その方言の重要な特徴とみなすことができるであろう。

⑥「条件副動詞の一つとして、*-ün(-ün)* のついた形を用いる。(例) *tsige(-そうする) ~ tsigin(-そうすれば), etc.*」という記述に対して、氏は「これにあたるチャハル方言の形は *tsigil(<tsigwel, モンゴル文語では tegebel)* であるので、オルドスの *ü* は、*ü* の単なる交替形としか思われな

い。」と述べているが、この文章は意味を成さない。「オルドスの *ü* は、*ü* の単なる交替形」というのはどういうことか。オルドス方言に「*ü* と *ü*」の交替現象があり、*-ün(-ün)* と並んで *-ü(-ü)* も用いられているということか。が言いたいのか。(モスタールトの記述にはこのような交替形は記されていない。)

文脈からすれば、「オルドス方言の *-ün(-ün)* は、チャハル方言の *-ü(-ü)* の、末尾の *ü* が *ü* に変わったものにすぎない」と言いたいようにも取れる。これが、なぜ「交替形」なのかは不明だが、*-ün(-ün)* がチャハル方言(および他の

方言)と異なる音形をもっていれば、それは疑いなく「オルドス的」な特徴である。

⑦「限界副動詞の接尾辞として、*-tar(-ter, -tor, -tō)* をもつ。」という記述に対して、氏は、「言うまでもなく、モンゴル文語の *-tara/-töle* の口語形であるが、内モンゴルの諸方言ではごく普通に用いられる形であって、これを「オルドス語」の特徴とするにはぎょうぎょうしすぎる。」と書いている。

筆者はこれがブリヤート語(したがって、内モンゴルのバルガ・ブリヤート方言も)の特徴と共通するのに興味をもって挙げた。確かにチャハル方言の口語形には *-tar(-ter, -tor, -tō)* の形が見られるが、チャハル方言をも含めて、より一般的なのは、末尾の子音が *ü* である形 *-tä(-tel, -tol, -tō)* ではなからうか。「内モンゴルの諸方言ではごく普通に用いられる」というのは、文字どおりに受けとっていいのだろうか。氏の文章には「内モンゴルの諸方言では……」という表現が何回か使われているが、いささか一般化しすぎではないか。

たとえば、フフバートル氏は、「(オルドス方言で)語末の鼻音 *n* と *ü* の区別が保持されている」というのはむしろ、「内モンゴル諸方言全体にわたって言えることであって、対比例にかかげられた、この区別を保持しないチャハル方言の方がむしろ例外的なのである。」と書いているが、バルガ・ブリヤート方言、およびシリシリンゴル、ウランチャブのハルハ方言もこの区別を保持しないことはよく知られている。